

文化博物館だよりNo. 65

みなさん、こんにちは。

今回は「史跡明石城跡新指定記念講演会」【2月19日実施、主催：兵庫県、兵庫県教育委員会、(財)兵庫県園芸・公園協会、明石市立文化博物館】の報告です。

県立明石公園は平成16年9月30日の官報告示をもって国史跡新指定となりました。(明石公園の中で273,771.50㎡)

これを記念して二名の方が講演会で、明石公園にまつわる歴史とこれからの展望について話されました。

1. 「城郭石垣から見た史跡明石城跡」より

当日は、あいにくの雨模様でしたが、早くから史跡ファンがたくさんあつまり、会場は熱気に包まれていました。まず、元東大阪短期大学教授・城郭石垣研究家の北垣聡一郎氏が、明石城跡の石垣の歴史と震災後の修復を中心に講演されました。



北垣 聡一郎 氏



北垣氏は明石海峡に面した舞子砲台の石積み(星型で台場とも言う)から話を起こし、和田岬や西宮にも砲台があり、幕末の頃には、舞子から明石にかけて11箇所もの砲台が、海峡を通る外国船にらみをきかせていたという興味深い話を聞かせていただきました。続いて、明石城がなぜ現在の場所にあるのかという経緯を、「経済の流通」の面から分かりやすく解説され、中世から近世にかけての明石川流域の変遷についても述べられました。また、阪神・淡路大震災後の復旧工事にまつわる話を詳しくいただきました。20,000㎡のうち被災した3,177㎡の復旧をわずか2ヶ月でやりとげた苦労話も興味深いものです。緻密な調査をもとにした「平成の天下普請」とも呼ばれるこの修復工事は、被災前の姿に復元することがポイントだったようです。まとめとして、今後の明石公園には城内に未知の部分はまだたくさんあるので、市民の関心の持ち方が大事だということです。

2. 「歴史の証人 明石公園」より

続いて講演されたのは、長年、明石公園の園芸・公園協会で明石公園の歴史と共に歩まれた辰巳信哉氏で、分かりやすい資料と共に100年に及ぶ公園の歴史を詳しく紐解いて解説されました。冒頭にアメリカの例をあげ、「歴史をおろそかにした街は衰退する。」という言葉が印象的でした。新しい建物が立ち並び、いくらきれいな街になっても、そこに暮らす人々の「心」がなければ街は成り立たないということです。



辰巳 信哉 氏

民営からの時代を含めると120年という歴史を持つ明石公園は、JRや山陽電車からも近く、明石市の経済発展の中では、必ずしも正当に評価されてこなかった場所のようです。しかし、大正7年(計画技術者:長岡保

平氏)に開園し、大正13年から始まった整備と文化財の保全を目指した拡張工事では、様々な識者が携わり(計画技術者:井本正信氏)、公園の基盤ができたそうです。その後、昭和7年の拡張では、神宮外苑の造園に携わった森一雄氏が明石公園の計画技術者として参加されました。しかし、その後の戦争での被害は甚大なもので、敗戦からの精神的再起を図る手立てとして、運動施設整備事業がスタートしたということです。拡張や整備によって、文化財や樹林地が犠牲になったようですが、当時の状況ではしかたなかったのでしょう。昭和32年に重要文化財に指定され、50年代には本格的に文化財に対する認識が深まってきたそうです。その後、阪神・淡路大震災以降の「土堀復原」は宮内庁の資料に基づいたもので、明治34年に除去されたものが甦りました。

まとめとして、公園の本質は「緑とオープンスペース」であると語る辰巳氏は、都市の生命や活力の源泉は、機能や用途の固定された施設(建築物など)にあるのではなく、公園や広場にあると語られました。「明石公園」を愛してやまない熱意が込められた講演だったと感じました。

二つの講演に共通して、「文化財の精密な調査と復元が必要であり、また、県や国としてはどのように活用し、残していくかということで、今後の明石公園は市民の判断にゆだねられている。」という言葉があり、市民と一体になった街づくりには、「本物の姿が必要」という言葉が印象に残りました。

明石市立文化博物館
編集:永田浩史